

人数も4人揃ったことだし、ドライバーもいる。すぐにも垂丁に出発したいところだったが、先ほどからタクシードライバーと話し込んでいたアーロンが戻ってくると、今日は警察が出ているから今から垂丁に向かうのは無理のようだと言われ、私たちに告げる。

え？やっぱり警察？

話を聞いて、やっと今朝お兄ちゃんの言っていた意味が分かってきた。結局はこういうことなのだ。

お客を乗せて垂丁に行くドライバーは、タクシードライバーとしての許可証を持っていないからいけないらしい。だが稲城で客引きをしているタクシードライバー達はほとんどがモグリの白タクだ。それを取り締まるために時折警察が出ていて、今日がその日だったという事らしかった。

なるほど現金収入になる仕事の少なそうな田舎町では、車の運転さえできれば手取り早く観光客から高めの運賃を請求する事ができるタクシードライバーは美味しい仕事に違いない。モグリでにわかタクシードライバーになる者が後を絶たないのは想像に易い事だった。そうか～、あのお兄ちゃんウソをついてた訳じゃなかったんだ。一見チンピラ風だが実は人のいい、彼のジャガイモのような顔を思い浮かべて苦笑した。

「君たちは今日どうするんだい？」アーロンが言った。「良かったらすごく素敵な温泉があるんだ。俺たちは今日そこに泊まるつもりだが、君たちもどうだ？ そうすれば明日の朝そろって出発できるよ」これといった予定も無い私は、アーロンの言葉に異存のあるはずも無かった。

温泉!! 埃っぽい土地でせいぜいシャワーしか浴びれない毎日を過ごす日本人で、この言葉に惹かれない者はそういないんじゃないだろうか。ウィンも同様だったらしく話は即座にまとまって、私達はその場で温泉まで送ってくれるというタクシードライバーの車に乗り込んだ。すべり出しからチームワークは抜群だ。宿に寄ってもらい垂丁にもって行くザックを積み込むと、車は温泉に向かって走り出し、一寸先も読めない旅の日常はこの日も思わぬ方向に展開していったのだ。

稲城の温泉地は街中から2、3キロ離れた場所にあった。ゆるい上り坂をのぼっていくと、車は温泉街というにはあまりに素朴な建物が立ち並ぶ場所に入って行く。土で塗り固められた農家の納屋のような建物が立ち並ぶ中、車一台通るのがやっとの入り組んだ狭い道路をそろそろと進んで行く。道路脇の溝からは湯気が立ち上り、そこで洗濯している人の姿も見られた。

うわぁ～！ホントに温泉だぁ～!!

アーロン達に連れて行かれた宿は、温泉街の中でもどん詰まりの一番奥だった。道はそこで行き止まりだ。回りは低い丘に囲まれたのどかな牧草地帯が広がっている。

旅館の札にはその名も「浮世辺絶山庄」と書かれていた。素晴らしい。しかも「温泉出水第一家」だ。建物の脇に源泉が沸き出ている正真正銘の源泉館だ。更に素晴らしい。朝、あのまま垂丁に行っていたら、こんな場所の存在も知らずに通り過ぎていたんだろう。まったく何が幸いするかわからないものだ。

荷物を降ろすと、タクシードライバーは明日の朝4時に迎えに来ると約束をして帰っていった。

「你好!! また来たよ～！」

既に昨夜一泊していて、宿の人達と親しくなっているアーロンと小青が中に声をかけると、チベット服姿の優しそうな老女と子供を抱いた女性がニコニコしながら出迎えてくれた。建物は農家の民宿といった趣で、二階にある客室は簡素なベッドが並んでいるだけだったが、日当たりが良く掃除が行き届いた気持ちの良い部屋だ。トイレは何処? と尋ねると、アーロンが笑いながら裏の林を指差した。

「これを全部持って行くつもり～!？」

部屋に荷物を運び込むと、三人は私の荷物の大きさをみて目を丸くしていた。

アーロンと小青はせいぜい日帰りハイキング程度の小さなザックを一つずつ持っているだけだ。ウインのザックはそれより一回りほど大きくはあるが、まだ私の半分ほどの大きさだった。

私の荷物は山の中でキャンプする事を想定して準備されていたため、歯ブラシなどの日用品の他に合羽や非常食、懐中電灯、シュラフにダウンの防寒着などでいっぱい膨らんだ大きなザックに加え、更に登山やハイキングなどの行動時に背負うための小さなザックまで別に持っていた。

「向こうにはちゃんと布団のある宿泊施設があるんだから、そんな物は必要ないよ～。垂丁に行く時にはここで不要な物を預かってもらったらいいさ」アーロン達は笑って言ったが、私は頑固に首を横に振る。

「だって、前に垂丁に行った時に必要だった物ばかりだもん！」

高山の気候は厳しいのだ。あれから三年、垂丁の状況がどのように変わっているかは知らないが、やっとの思いでここまでやって来たのに、何かが欠けた為やりたい事を諦めなければならないような事態になるのはご免だ。垂丁には万全の準備で臨みたかった。

荷物を置き宿の人に振舞われたバター茶を飲んで一息ついても、時間はまだお昼前だった。

「俺達はその山に登ってみる事にするよ。君たちも好きに過ごしてくれ」仲良く出かけて行くアーロンと小青の背中を見送ると、私とウィンも散歩に出かける事にした。知

り合ったばかりのウィンと互いに自己紹介しながら、先ほど車で上ってきた田舎道をブラブラと下る。ちょっとボーイッシュで女性というより一見少年のように見えてしまうウィンは、以前は旅行ガイドの仕事もやっていた程の旅好きで中国国内はずいぶん色々な場所を旅行しているそうだ。「中国には素晴らしい場所がいっぱいあるよ～」誇らしげに語るウィンがちょっと羨ましく思えた。

あたりの景色は、牧草地が広がり、チベット語の経文を彫り付けた岩があったり、きれいな小川が流れていたり歩くのも楽しかったが、しばらく歩くうち自然の風景は途切れ、道は舗装路に変わってしまった。夜間は厚手の上着でも着ていなければいられないほど冷え込むせいで、頭上で輝く太陽はまるで真夏のようにジリジリと照りつけている。まったく高地の気候は激烈だ。

「私達どこに行くつもり？」ウィンが問いかけてくる。特に目的など無く歩いていたのだが、街に近づくにつれ私は再び稲城の街に惹きつけられていた。

昨日稲城に辿り着いてから、まだ殆ど街の様子は見ていない。このまま一本道を歩いていけば自然に稲城の街に着くはずだし、明日から数日間亜丁で山籠り(?)する事を思うと、果物や携帯食なども、少し買っておきたかった。

「私はこのまま稲城の街まで行くけど、あなたは好きにしていよいよ」ウィンに答えると、「じゃあ、私は辞めておく」彼女はアッサリ引き返して行った。一人旅同士の関係って楽なものだ。

ウィンと別れしばらくすると、背後からバイクの音が響いてきた。振り向くと一人のおじさんがバイクで道を下ってくる。炎天下の舗装路を歩くことに嫌気がさしていた私は、手を上げバイクを止めると街まで乗せていってくれるよう頼んでみた。おじさんは快く私をバイクの後ろに乗せてくれ、あっという間に街まで連れて行ってくれた。「お幾らですか？」念のために訊ねてみたが、おじさんは笑いながら手を振ると走り去って行った。

稲城は小さな田舎の街だ。街並みは、中心となる交差点からせいぜい一キロ四方の中にほぼ納まってしまうので、一時間も歩けば殆ど歩き終わってしまう。三年前に訪れた時には強面の男たちが闊歩する山賊の街との印象を受けた稲城だったが、稲城が変わったのか、私がここまでやってく間にチベット族の風貌に慣れてしまったのか、今回は何という事の無い田舎町のような印象だ。

以前この土地を訪れた時、皆で二度も訪れた餃子屋があり、そこの女の子が可愛かった事や、向かいの小さな雑貨屋で買い物した事が思い出に残っていたので、探してみたが見つからなかった。三年の間に店も代替わりしてしまったのだろうか。

ブラブラ歩いていると、昨夜の上海の彼女が数人の仲間と一緒にいるのに路上で出会った。

「あら！もう昼食は食べた？良かったら一緒にどうぞ？」

いつも一人で侘しく食事している私は迷わず彼女達の

仲間になって街の食堂に入った。上海小姐の友達はまだ旅行を続けており、彼女だけ仕事の関係で先に上海に戻るのだそうで、その場にいた中国人達は旅の途中で知り合った者同士らしかった。

久しぶりに大勢で取る食事だ。たくさんのおかずを前に白いご飯を食べるのも四娘山メンバーと別れて以来だったが、それより旅ですれ違った者同士がこんな風に一緒に食事できることが楽しかった。しかも私以外は全員その場で知り合ったばかりの中国人だ。自分がこんなに自然に彼らに溶け込んでいるのが不思議だった。

楽しい食事会が終わる頃、明日康定に戻るためのバスチケットを買いに行くと出て行った上海小姐はしばらくして真っ青な顔で戻ってきた。

康定行きのバスチケットは発売と同時に完売で、あさっての便まで売り切れているのだそうだ。他にもチケットにあぶれた者が大勢いるらしく、僻地とはいえこれだけ観光客も集まる土地だというのに、稲城の交通事情はきわめて悪いようだ。「明日までに康定に戻らないと休み明けまでに仕事に戻れないわ、何とか方法がないか当たってみる」彼女は青い顔をして再び街に走り出していった。

いつ戻るか判らない彼女を待っていても仕方ないので、ひと時の食事会はその場で解散し、私は一人で稲城散歩を続けた。「亜丁の食事は高くて不味いのよ～」昨夜の上海小姐の言葉を思い、お湯を注ぐだけで食べられるインスタントラーメンや果物、登山には非常時のカロリー補給のため携帯必至のチョコレートや、山ではいろいろと便利で必需品のトイレトペーパーなどを買い求めた。

路上で再び上海小姐に出会ったので様子を聞くと、チケットが買えなかった者同士が集まってタクシーをチャーターし、一人200円で康定に向かう事になったそうだ。バス代に比べるとかなりの割高だが背に腹は変えられないのだろう。やはり稲城のタクシードライバーは美味しい仕事だ。

稲城の街を二周し買い物も終えたところで温泉に帰ることにした。頭上の太陽は相変わらずジリジリと照りつけている。往路のヒッチハイクに味をしめていた私は、帰りもその作戦で行こうと後ろを振り向きながら歩いた。しばらくすると客を乗せたタクシーのような車がやってきたので、手をあげると止まってくれた。

温泉まで乗せて欲しいと頼むと、運転していた若いお兄さんが乗れというゼスチャーでドアを開けてくれる。温泉の入り口まで来たところで降ろしてもらい、お金の事を尋ねたがやはり彼も手を振った。中にいた本当のお客はお金を払うのだろうから私はズルしてしまった感じだが、昨日のタクシードライバーの兄ちゃんといい、さっきのおじさんといい稲城の人たちはみんなスレてなくて親切な印象だ。

やっぱり稲城はいい街だった。